全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：歴史と文化
部会長名：高田京比子
作成者名：高田京比子

概要（2ページ）

（１）組織・運営について

本年度の歴史と文化教育部会は、人文学研究科の日本史学、西洋史学、東洋史学、美術史学に所属する計１３名の教員、国際文化学研究科のアジア・太平洋文化論、日本学、ヨーロッパ・アメリカ文化論のうち歴史を専門とする計５名の教員、同じく国際文化学研究科の比較文明・比較文化論で科学史を専門とする１名の教員、人間発達環境学研究科人間発達専攻表現系講座に所属し近代建築史、西洋音楽史・音楽美学、音楽民族学、ファッション文化論・表象文化論を担当する計４名の教員から構成されている。これに考古学２名、日本史２名、科学史１名の非常勤を加えて、日本史・西洋史・アジア史・東洋史・美術史・芸術史・科学史・考古学の７科目の授業を提供した。昨年度からの大きな変化は、非常勤枠が削減され、それにともない科学史のコマ数がひとつ減ったことであろう。来年度は、さらにこの１コマが削減されるため、科学史の授業はさらに減る（現役の教員による２コマのみ）。科学史を広く学生に提供することがますます難しくなっていくが、教員と費用面から致し方ないのであろう。

（２）実施状況について

①教育内容

シラバスを見れば、扱う対象は、古代ギリシア・ローマから、現代のラテンアメリカなど時代的にも幅があり、また地域を取ってもヨーロッパ、イスラム世界、中国、日本とバラエティに富んでいる。また狭義の歴史だけでなく、「色彩感覚の歴史」や「中世日本の材木の流通」など、広く歴史に関わる文化的・経済的な内容が用意されている。このように当部会の提供する教育内容は、教員数相応に幅広い分野にわたっており、受講生の多様な関心に答えることができる。

②教育方法

授業の形態は講義形態が主流であり、１５０名近い学生を対象としている場合もあるが、授業アンケートでは、概ねよく理解され有益であったと回答されている。また質問票の活用によって学生の意見をすくい上げる工夫がなされている。ブックレポートを課している教員は引き続き存在するが、小テストはあまり見られない。クォーター制となり試験の回数が倍になったため、小テストを行わなくても学生の理解度が測りやすくなったことと小テストを行う余裕がない、という両面があろう。じっさいクォーター制の導入により試験の負担は倍になり、また７コマ半の内容に関する試験となるため、１回の試験で問う内容は、コマ数相応に質・量とも減っていると考えられる。もっとも授業のまとめを毎回させてそれを試験の持ち込み資料にしたり、BEEF を活用するなど、教員の側でも少ないコマ数でいかに効果的に教育するかについて、新たな工夫が見られる。

③クォーター制への対処

クォーター制が導入された２年目である本年度は、先にも述べたようにさまざまな教員側の工夫が見られた。また、もともと歴史と文化部会では、第１クォーターと第２クォーターで異なる内容を提供し学生がひとつの科目についてより多様な内容を学習できるように配慮して、日本史、西洋史などすべての科目について A と B を用意していた。しかし、じっさいは、A と B の両方を履修する学生はそれほど多くなく、また A と B に分けても、結

局導入部分は同じ内容を繰り返さなければならないということがわかった。そのため、本年度は連続でA・Bの授業を開講しない教員が複数見られた。このような傾向は来年度も増すようである。

（３）課題および総合所見

昨年度、歴史と文化教育部会ではピア・レビューを行ったが、比較的理解度・総合評価の高い教員を選んで授業を行ってもらった。その結果、「教科書にはない最新の知見をおりまぜながらも、情報を絞る」「重要事項は繰り返して良い」ということが学生の理解と興味を促すことがわかった。歴史はどうしても背景知識を十分説明しようと詰め込みすぎになる傾向があるが、それを自重しつつ内容を絞って提供することの重要性が確認された。それを受けて、本年度のアンケートの中には、「世界史を全く履修していない」学生と「受験勉強で世界史を学んだ」学生の双方が、「有益で面白かった」と回答している授業が登場し、だんだん教員の工夫が学生に伝わってきている様がうかがえる。この教員は次回のピア・レビューのさいに、ぜひ授業担当者として登板していただきたいと考えている。ただ、やはり本年度も授業振り返りアンケートを見てみると、同じ内容の授業にもかかわらず、文系の学生の方が理系の学生より理解度・満足度とも高い得点を記録している場合があり、工夫の共有がさらに促進されることがのぞまれる。

最後に、歴史と文化部会の提供授業は、全体としてバランスの良い科目を提供しており、また授業振り返りアンケートによる理解度、総合評価も平均３は超えるまずまずのできである。ただクォーター制への対処に関して言えば問題もある。A・B 両方を開講しても結局導入部分がかぶってしまうということ、そのためA・B両方の授業を開講しなくなるということは、学生側にとってみれば、結局ひとつの科目を十分に学習する機会を奪われていることになるのではないだろうか。確かに教員側にも工夫は見られ、ひとつひとつの授業はよく理解できたと考えている学生も存在はするが、7.5コマが大学の教養にふさわしい時間数かどうかは、検討の余地があろう。

<u>項目・観点ごとの記述</u>

<u>基準５　教育内容及び方法</u>

５－１【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ，それに基づいて教育課程が体系的に編成されており，その内容，水準が授与される学位名において適切であること。】

５－１－③：　教育課程の編成又は授業科目の内容において，学生の多様なニーズ，学術の発展動向，社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上） 担当教員の全員から「はい」との回答を得ている。またシラバスによれば、個々の教員が最新の研究成果に注意をはらいながら授業を組み立てていることがわかる。用意されている授業は内容も多様なものであり、さらに、同一の科目についてもＡとＢの２種類の授業が用意されている。学生はそこから自分のニーズに合わせて授業が選択できるようになっている。
根拠資料 シラバス、配布資料

５－２【教育課程を展開するにふさわしい授業形態，学習指導法等が整備されていること。】

５－２－①：　教育の目的に照らして，講義，演習，実験，実習等の授業形態の組合せ・

バランスが適切であり，それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150 字以上）
歴史と文化教育部会においては、基本的に講義形式で授業を行っている。そのなかでも例えば、授業中に質問票を配ってそれに対する回答を逐次実施したり、考古学では現物を回覧したり、さまざまな工夫が行われている。また試験やブックレポートでは、授業の内容をまとめて文章を書くという作業が多く取り入れられており、全体として知識偏重にならないような配慮がなされている。
根拠資料 シラバス

５－２－②：　単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100 字以上）
すべての教員が、「はい」と答えている。またアンケートでも「目標がわからない」と答えた学生はほとんどおらず、試験答案を見ても、かなりの学生がまじめに授業にとりくんでいる。なかにはブックレポートを課したり BEEF を活用している教員も見られる。
根拠資料 シラバス、ブックレポート、試験、配布資料

５－２－③：　適切なシラバスが作成され，活用されているか。

観点に係る状況（50 字以上）
すべでの教員が「はい」と答えている。アンケートで１名シラバスに対する不満を述べた学生がいたが、大きな問題ではなかった。
根拠資料 シラバス、アンケート

５－２－④：　基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100 字以上）
本年度の授業振り返りアンケートの中には、「世界史を全く履修していない」学生と「受験勉強で世界史を学んだ」学生の双方が、「有益で面白かった」と回答している授業が登場し、だんだん教員の工夫が学生に伝わってきている様がうかがえる。
根拠資料 授業振り返りアンケート

５－３【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ，それに照らして，成績評価や単位認定，卒業認定が適切に実施され，有効なものになっていること。】

５－３－②：　成績評価基準が策定され，学生に周知されており，その基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100 字以上） 　総じてシラバスではどのような基準で成績を評価するかということが、明示されており、それにそって成績評価が行われている。また秀の割合についてもほぼ１０%以内におさまるようになり、成績評価が適切に実施されている。
根拠資料 答案、成績評価分布、授業評価分布

５－３－③：　成績評価等の客観性，厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100 字以上） 　上でも述べたように、シラバスでは、成績評価の際に、出席点、ブックレポート、期末テストなどをどのような比率で用いるか、ということが明示されており、客観性・厳格性を担保する措置が講じられている。また授業中にも適宜、成績評価についての情報が周知徹底されており、学生の不満はない。
根拠資料 シラバス、各教員からのアンケート

<u>基準６　学習成果</u>

６－１【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして，学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について，学習成果が上がっていること。】

６－１－②:　学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して，学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100 字以上） 　すべての教員が、授業評価アンケートや試験答案に基づいて学習成果が上がっていると判断している。部会長が入手した授業評価分布も、ほとんどが「どちらともいえない」以上の評価となっている。昨年、一昨年は「いいえ」を回答した教員もいたが、本年度はすべての教員が「はい」と答えた。
根拠資料 　授業評価アンケート

<u>基準７　施設・設備及び学生支援</u>

７－１【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され，有効に活用されていること。】

７－１－④：　自主的学習環境が十分に整備され，効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50 字以上） 　ハード面での学習環境は整っている。ただ BEEF に資料をアップしたところ、きちんとコピーして授業に持参していない学生もおり、徹底が望まれる。
根拠資料 　附属図書館，大学教育推進機構の自習室，各部局のラーニングコモンズ等 　BEEF と試験答案

７－２【学生への履修指導が適切に行われていること。また，学習や課外活動等に関する相談・助言，支援が適切に行われていること。】

７－２－①：　授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100 字以上） 　ひとりをのぞいて、すべての教員が「はい」と答えている。月曜１限については、特に高学年に出席せずにシラバスもよくよまずに試験を受けた学生がいたようである。これについては、教員側の努力では如何ともしがたいところがあるが、周知に努めたい。
根拠資料 　教員の自己点検・評価シート

７－２－②：　学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており，学習相談，助言，支援が適切に行われているか。
また，特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり，必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100 字以上） 　すべての教員が「はい」と答えている。各教員の自己点検・評価シートでは、今年度は特に必要性がなかった教員もいたものの、おおかた、授業前後の質問時間、オフィスアワーの提示、また授業で行う質問票などが実際に行った活動として挙げられている。
根拠資料 　教員の自己点検・評価シート